

やまと 民俗への招待

鹿谷 勲

生駒山十三峠の十三塚について、概要、発掘調査、まつわる伝承、さらに周囲への影響などを紹介してきた。

十三塚は、県内に他にある。天理インターチェンジから名阪国道を東に入ると、すぐ左手に天理市岩屋（岩屋ヶ谷）の山の山腹から頂上に古墳集落が見える。ここに松十三基が点在し十三塚と呼ばれていた。明治の『名勝旧蹟取調書』には「旧記伝説口碑ナキモ一山二十三ヶ所古墳墓散在セルヲ以テ此ノ山ヲ十三塚ト称ス」と記されている。

宇陀市室生無山の向山古墳群も十三塚と呼ばれていた。岩屋や無山の古墳は六世紀末ごろの群集塚とされるが、後に十三塚と呼ばれたようだ。

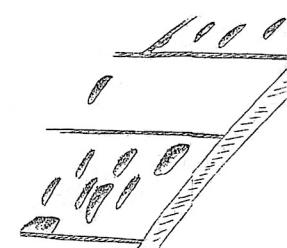
吉野郡野迫川村北股には、十三基の石碑があり、水害で流失し、今は宝篋印塔一基が清久寺境内に残る。田村将軍をまつるといい、毎年10月に里芋祭りで祭りが行われてきた。

十二三仏信仰背景 各地に塚

益地部にも十三塚の事例があった。橿原市中曾司の宗我部比古神社北側の田んぼに、南北に細長い塚が南北方向に並ぶようになっていた。享保21年（1736）刊行の『大和志』には、「荒墳」の一部として十三基が中曾司村にあるとしている。



左：中曾司の十三塚（名勝旧蹟取調書より）右：谷田地蔵堂（生駒市）の十三仏板碑・天文19年（1550）



ところで十三塚はどういうような考えに基づいて築かれ始めたのだろう。

「戦死者などを埋めた」とはするものの、墳墓ではなく、何らかの信仰により築かれたものに違い

ないが、築造の経緯は残らず、掘っても遺物が出ないことから、客観的な史料は少なく、その研究は口碑や伝説に頼らざるを得なかった。貝原益軒は、十三仏による祭祀を行っているが（『筑前風土記』）、幕末に

益軒は、十三仏による祭祀を行っているが（『筑前風土記』）、幕末にいさぎで十三塚と呼ばれていた。享保21年（1910）に、全国に十三塚あり、十三塚と呼ばれていた。享保21年（1736）刊行の『大和志』には、「荒墳」の一部として十三基が中曾司村にあるとしている。

周囲は田畠でその後開墾された。ところでは十三塚はどういう関心を寄せ、境塚の性格や修驗道との関わり、十三塚が大塚と二塚から構成されるのは、聖天及び十二天壇ではないかとしている。十三仏信仰は、日本常民文化研究所が青森県から鹿児島県にいたる332カ所を調査対象として、改めて全国的な現況調査を実施した。十三塚は中部地方を含む東日本に多く分布していたが、先の大戦中の山野の開墾や戦後の各種開発事業による破壊滅失が進み、十三基すべてが残る事例は17例のみであることが判明し、十三基の塚形式が、十三塚築造の主流を占めるものだとされた。

その後1982から83年にかけて、神奈川大学日本常民文化研究所が青森県から鹿児島県にいたる十三仏板碑、十三仏石碑を配して供養するもので、室町期の成立とされると、塚を築くことから、十三仏板碑、十三仏石碑へとその信仰内容は変遷したとみられ、生駒市や平群町でも、室町時代後半には石造十三仏が数多く造立されている。大和河内の国境に築かれた十三塚の十三塚も、こうした十三仏信仰の背景としながら、塚を鎮め封じる意味合いも兼ねて築造されたのではないか。十三塚の十塚は、1984年3月に県指定有形民俗文化財に、さらに86年3月には、国の重要有形民俗文化財に指定されている。

だ将軍塚があつたが、水害で流失し、今は宝篋印塔一基が清久寺境内に残る。田村将軍をまつるといい、毎年10月に里芋祭りが行われてきた。

吉野郡野迫川村北股には、十三基の石碑があり、水害で流失し、今は宝篋印塔一基が清久寺境内に残る。田村将軍をまつるといい、毎年10月に里芋祭りが行われてきた。

表

（奈良民俗文化研究所代
表）

|| 次回は15日